

9 外来指導におけるHbA1cの理解度と1年後の血糖コントロールについて

内山恵美子・岡村 幸代(高木内科)
岡田真津美・高木 正人(クリニック)

患者指導に関わってみると、知識の不足または誤った知識を持っている人が少なくない事がわかった。HbA1cについて調査・指導したところ半数近くの人が全く理解してなかった。1年後再調査・再指導の結果、理解した人の数は増加したがHbA1cの値は悪化していた。全く理解できていなかったが1年後理解できるようになった25名に重点をおいて、この原因と指導効果を検討した。個別にHbA1cについての調査・指導を行い、ポスターにて視覚で訴え、可能な限り糖尿病手帳に自己記入させ注目するようにした。結果、血糖コントロールの改善したのは、年齢が若く約40～60歳で推定罹病期間が約1～2年で食事療法のみの人であった。年齢が約60歳を超え推定罹病期間が約6年以上で特に経口血糖降下剤療法の人は、血糖コントロールは改善しないことが分かった。今後、合併症・指示カロリー・理想体重についての指導効果の検討と、さらに改善意欲が湧く指導法の検討が必要と思われた。

10 糖尿病教育入院の検査項目についてパンフレット作成から実施に至るまでの一考察

一患者にとって理解しやすい検査説明とは何かを考える一

下間玲美奈・沢田サチコ(木戸病院)
坂井 静子・舟越 羊子(看護部)
下斗米孝之・津田 晶子
濱 齊 (同 内科)

【目的】(1)糖尿病教育入院参加者に検査説明用紙を配布し、検査の概要の治療の動機づけをする。(2)検査説明用紙を使用することにより、看護婦間の統一した指導をはかる。

【対象・方法】糖尿病教育入院参加者30名(20～70代)を対象に、看護研究メンバー3名が検査を実地体験後、検査説明用紙を作成し教育入院参加者に配布しアンケート調査を実施する。

【結果】(1)対象者の80%以上から効果ありと

の回答が得られ、検査に対する関心も高く自己管理への動機づけになった。(2)内容がわかりやすくスムーズに業務に取り入れられた。(3)一定した内容での指導の必要性を再認識することができた。

【結論】(1)効果的な教育を実践するためには、医療スタッフと患者が共通した内容でかかわる事が重要である。(2)内容についてわかりやすく伝え、理解を得ることが重要である。(3)今後他部門へも情報提供しながら連携を密に図ることが大切である。(4)検査説明用紙をマニュアル化することにより、一定の内容で継続した指導が実践され有効である。

11 ノボペン300の指導のまとめ

平田 憲雄(下越病院)
薬剤課

【はじめに】昨年5月～薬局で再指導をおこない若干の知見をえました。

【対象】ノボペン300を使用している外来患者47名。男性19名、女性28名。

【結果】ほとんどの患者さんは、注入単位を間違わずに注射ができていましたが自分の使っているペンフィルの名前や何単位入っているか知らない方は多く、またペンを振ること、空うちをすることなど注射の準備操作や正しい注入がきちんとできている方は半数以下でした。

また今年行った再々指導では再指導により理解が進んでいました。

【考察】ノボペン300のマスターのためには繰り返し指導をすすめていく必要があります。

12 インスリン治療における夜間の低血糖について

田村 紀子・百都 健(新潟市民病院)
田中 直史 (第二内科)

【目的】午前3時血糖(以下3BS) < FBSの頻度、3BSが低血糖域にある頻度、3BS < FBS群の臨床的背景をみる。

【対象】外来通院中のインスリン治療患者で夕前か眠前に混合型か中間型を用いている120人。